

<卒業論文小特集>北條民雄論「闇からの光芒」

渡辺, ふさ枝

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

27

(開始ページ / Start Page)

10

(終了ページ / End Page)

25

(発行年 / Year)

1982-12-05

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019347>

北條民雄論

「闇からの光芒」

渡 辺 ふ さ 枝

目次

- 序章
- 第一章 自我としての「いのち」の認識
- 第二章 「いのち」の懷疑
- 第三章 新たな自我意識の方向
- 第四章 神への関心
- 終章 闇からの光芒

序章

昭和二十二年、プロミンが発見されるまで癩は天刑病であった。癩の宣告は死の宣告を意味したのである。その症状は醜悪で、まさに生きながら腐敗していくという戦慄すべきものである。当時の医学では、治療の道がないばかりか、遺伝性と誤解されており、のろ

われた血として、発病と共に戸籍からも抹消され、癩者は「国辱」であるという社会通念が存在していたのであった。

肉体的苦痛だけでなく、こういった精神的心理的屈辱を伴ないながら、なぜ北條民雄は生き続けたか、生き続ける力をどこから得ることができたか、という素朴な疑問をふり出しに、私は彼と対座したのである。

「癩院の中で小説を書く」——この異様な行為をなした北條の苦悩をたどりながら、暗黒の世界で北條の手にふれたものは何であったのか、闇の中で北條が見たものは何であったのか、作者の影であり、重々しい渴望が投影された作品をもとに考察していくことにする。

第一章 自我としての「いのち」の認識

——「間木老人」から「いのちの初夜」へ——

「癩患者といふものは、その生前にも縁者がなく、その死後

にも遺族がないとしておくのが、血の繋がる人々への恩愛なのだ。」

(「寒風」)

川端康成の癩患者についての見解は、当時の癩者の置かれた立場をよく表わしている。北條民雄についても同様で、彼の本名も出生も経歴も明らかにされてはいない。したがって、発病までの彼の生活がどういふものであり、どのような人格形成の後、入院してきたかは、北條が書き残した日記、書簡、覚え書き等を拾い集めて推察するしかないのである。

それらによって再構成してみると、北條民雄は徳島の貧しい農家に生まれ、「幼い頃に母を失ひ、愛情の優しいあたたかみを知らぬ。」(「孤独のことなど」) まま育つたのであった。そして、「十七の春、小林多喜二氏の『不在地主』を読んで初めて現実への夢を破られ」(「年頭雑感」)、マルクス主義思想に傾倒していったのである。ここから、発病前の彼は、その思想理解の深さは不明ながら、ある程度マルクス主義思想によって自己形成をなしていたことが判明する。

だが、癩の発病は、この北條の自我と思念を根底からゆすぶったのである。癩院という社会から隔離されたところでは、自我を支えていた理想とする思想さえ、もろくも崩壊していくしかなかったのである。いや、北條の自我そのものが癩発病によって余儀なく崩壊させられたという方が正しいかも知れない。

「僕の現在たより得る思想はマルクシズムを措て他にない。けれど、この癩病患者の北條がそれを信奉したとてどうなる。いや、この言葉はうそだ。マルクシズムにたより切れない僕を発

見するからだ。僕は最早階級線上から落伍した一廃兵に過ぎないのだ。」

(昭和十年七月四日 日記)

自我の崩壊は絶望にほかならない。北條にとってはまさに正体不明な或るものから強いられた不条理な崩壊であった。北條は背負いきれないこの不条理を背負って癩院に入院してきたのである。ここでまず北條が直面したのは、「生きるべきか、死ぬべきか」という問題であった。社会からかけ離れた場所で、社会の進展に関わりなく、肉体が腐っていくのを待つだけの生活にどれだけの価値があるのか。まして、今まで自我を支えていた思想も無価値に等しいものと化されてしまったからには。

この疑問への端的な答えは自殺であった。北條は幾度も自殺を試みている。死ぬ方が、いや、癩者にとって死こそが、安楽への道なのではないだろうか。社会から拒否され、医学は気安めにしかすぎず、日々進行する病魔を体内に宿している。自ら生命を絶つ癩者も多くいたそうだが、この厳しい選択も容認するしかない癩者の生き方であったといえないだろうか。誰も責めることはできない。

だが、北條は死ななかつた。死にきれなかつたのである。癩菌によって内部から強迫される自殺を考えれば考えるほど、判ってくるのは生に対する執着ばかりだったのである。つまり、北條にとつて、生と死は表裏一体のものであった。「死にたいと思ふのもほんとの心は生きたいため。」(「癩院受胎」)であり、「俺には心が二つあるのだらうか。」(「いのちの初夜」)と自問しつつ、生と死の間でゆれる心に耐えていたのである。北條は、一方ではひどい絶望に陥り、苦痛にうめきながら、他方では自殺を試みようとする急に馬

鹿げたものにみえる自分に戸惑うのであった。

「兎に角最後まで卑怯なまねをしたくないのである。苦痛に正面からぶつかって自分の道を発見したいのである。」

(「発病」)

この強靱な意志は美しい。だが、それは決して「生きる」ことの宣言ではない。北條にとって自殺が「卑怯なまね」ではなく、「自分の道」と納得できたなら、死もあり得たからである。ところで、このように、「死」を絶えず意識の根底におきながら死にきれない事実を受け止めた時、癩院の「灰白色に澱んだ」(昭和十一年六月二十七日 日記)「地獄のやうに平和」(昭和十二年九月二日 中村光夫宛書簡)な世界で生きる道を模索しはじめたのである。

それはとりもなおさず、発病によって崩壊した自我をたてなおすということであった。なによりも、自我の再建が先決であった。

北條が癩院に入院した時の症状は、「いのちの初夜」に書かれている通り、まだ軽症の方であった。したがって、北條の苦痛は肉体的な痛みよりも、やがて肉体が腐敗していくというこの認識から来る苦痛や、社会から疎外されたという屈辱の方が大きかったに違いない。そんな北條に、あらためて癩の恐怖を認識させたのは癩院で目の当りにした凄惨な風貌姿態の病人たちであった。それは近い将来必ず行き着く自己の姿ではないか。普通どのような強い衝撃や、強烈な印象であっても、それが感覚的、生理的なものにとどまる限り、いつかは慣れ、時間によって薄められ消えていくものである。だが、癩者である北條はこの恐怖や衝撃に全存在をゆすぶられ

ざるをえなかった。その衝撃を忘れ去ることも、そこから逃れ切ることでもできないものだとするれば、終生、北條の文学の起点となり、主題となったのも必然だといえる。

あきらめの姿勢や、現実から逃避しては文学は生まれえないし、まして、そこから自我の確立など見つけ出しようがないのである。北條にとって、「文学」はまさに自身が生きるための一つの手段であり、自己の内面をえぐりだす刃だったのである。

「それまで私の理性の圧迫下で黙々と耐へてゐた『苦痛』といふやつが、少しづつ頭を拾げて、やがて理性に対決する力を持ち始めたのだ。そしてこれは必然私にペンを持たせた。」

(「年頭雑感」)

北條が文学を必要とした動機を自身はこうのべている。苦痛に対する理性は、いいかえれば死に対峙する生ともいえよう。なぜなら、苦痛とは癩と癩に伴なうあらゆる屈辱を意味し、それは最早、逃れようのない絶望だからである。北條はそれに対決する生の武器として、「文学」が必要になったと表現している。それは自分の置かれている状況の苛酷さを知り、そこから生ずる苦痛や嘆きをことばで表現することによって自身の不幸を昇華させる作業でもあった。

「いのちの初夜」を川端康成に書き送る時、北條は次のように記している。

「僕には、何よりも、生きるか死ぬか、この問題が大切だったので。文学するよりも根本問題だったので。生きる態度はその次からだったのです。」(昭和十年十二月八日 書簡)

自分の絶望に真正面からぶつかり、生死の間の血路を見い出すが

め、いい作品を書こうなどという野心を捨て、いや、おそろくそこまでの思いも及ばないまま、止むに止まれず書いたということがしのばれるような文章である。文学とは、北條が生死の血路を見い出すためにしがみついたまさに「一本の葉」（昭和十二年一月十二日 中村光夫宛書簡）だったのである。

文学によって、生きること何らかの光明や可能性を見い出そうとし、書き綴ることによってほのかに見えてくるものを求めようとしたのであろう。

北條は処女作「間木老人」で、「自分に足場のないことを、この時切実に感じた。」と心の空白状態を告白している。そして、「自分が大きな危機の前に立ってゐることを自覚しつつ深い溜息を吐いた。」と結んでいる。抛るべき足場がないという自覚は新しい足場を模索する行為をひき出す出発点でもある。それは宇津が、「右を向いても左を見ても、毀れかかった泥人形に等しい人々ばかりで、自分だけが深い孤独に落ち込んで行くやうで、足掻きながら懸命に正常な人間を探し——略——自分が癩病に患つてゐることを肯定しながら、自らを患者一般として取り扱ふことの出来ぬ心の矛盾。」を感じ、「全治する人もあるのですか。」「どうすれば癒りませうか。」と空しい問いを狂人相手に発し、首を吊ろうとしながらも、「そんなに急いで死ぬ必要もない。」と考えなおすという過程をたどりながら行きついた自覚であった。そして、この危機の自覚は、やがて現実の暗鬱さをはっきりと見すえ、「いのちの初夜」へとつながっていくのである。

北條は「いのちの初夜」において、登場人物二人に自らの「内的対話」をさせている。彼は、死に得なかつた自分に佐柄木のことばで問いかけるのである。

「死ぬると安心する心と、心臓がどきどきするといふこの矛盾の中間、ギャップの底に、何か意外なものが潜んでゐるとは思ひませんか。」

「何か意外なもの」とは何か。この場合、それはおそろく「生命」であろう。意識では自分を殺そうとしながら、肉体はそれを裏切り、どこへも行き場がない絶望をひきずりながら、しかし、北條は一つの事実をつかんだのである。

「人間ではありませんよ。生命です。生命そのもの、いのちそのものなんです。——略——あの人達の『人間』はもう死んで亡びてしまつたんです。ただ、生命だけが、びくびくと生きてゐるのです。」

それはまさに暗黒の中で底光りを見せる重々しい事実であつた。北條はこの事実を凝視した。しかも、「何もかも奪はれてしまつて、唯一つ、生命だけが取り残されたのだった。」と表現することで、北條は自我が滅びたことを確認したのである。だが、自分は生きてゐる、「ぬるぬると全身にまつはりついて来る生命。」を感じた時、その生命を生命として自覚すること、そして、その自覚を復活として転換させること、つまりは「生きてゐるものは生きてゐる」という生命の存在を覗見したのである。

では、廃人となりゆく「いのち」をどのような方法で自覚し、自我として確立していくか。さらに北條はその方法論を展開する。

それは、「癩病に成り切ること。」「一度は屈伏して、しっかりと癩者の眼を持」つことである。癩者にとって、残された唯一の生の自覚は、まず癩者になり切ることと自己のものに出来るというのである。では、癩者になり切るとはいかにあるべきことか。

「僕思ふんですが、意志の大きいさは絶望の大きさに正比する、とね。意志のない者に絶望などあらう筈がないぢやありませんか。生きる意志こそ源泉だと常に思っているのです。」

社会的に葬り去られ、戸籍からも抹消された現実を徹底的に認識し、又、社会的人間として復帰することさえ、徹底的に絶望することであり、肉体をむしばむ癩の影響を精神にまで及ぼさないことでもある。つまりは、精神力、意志力あるのみという結論となるのであった。

過去をさがし求めることを止め、癩院の中で、癩者としての生活を獲得する時に、人間として復活すると力強く語る佐柄木の強靱な意志は、そのまま生を模索する北條の方向づけとなっているのである。だが、北條にとって「社会」は自己の中から簡単に抹消できるものではなかったはずである。肉体が腐敗していくのを認識しながらも、尾田のように絆創膏と繻帯と膿汁の中でうめいている重症患者の姿に、いずれいきつく自分を信じたくない気がしたり、癩者に親しみを覚える自分に嫌悪感を抱いたり、夢の中でさえ、「癒りませうか。」とたずねたりする心理の描写などは、すべて社会とのつながりを求める心のあらわれである。しかも、その願いは永久にかなえられないものであることを北條は知っているのである。知っているからこそ、あらゆる修飾をとりのぞいた「いのち」そのものを

認識するところまで迫っていったのであろう、「いのち」そのものの前では、社会も付帯物にすぎない。癩も又、しかりであった。

これが後に「いのちの理論」と呼ばれるようになった「純潔無比の確信」（丸山静）である。だが、この時の北條にとって、これは思想や理論以前のものだったのではないだろうか。「書かねばならないものでした。」（昭和十年十二月八日 川端康成宛書簡）と記すように、北條にとっては絶望という闇の中で見つけた一つの光る事実そのものだったのではないか。確信というにはあまりに純粹すぎるゆえのもろさがあるのではないか。力強く語る佐柄木のことばに、尾田をして、「この男は狂っているのではないか。」と思わせる部分に私は北條のゆらぎを見たいのである。

しかし、北條はとにかく生へ、絶望の暗闇の中で強靱な意志と精神力を武器として、自らの体内に宿る癩菌という内なる敵を見すえながら、生の世界へ歩き始めたのである。彼が裸形の自己を見すえた底から「いのち」の核心に至り得たのは、驚くべき内的な力のためものだ、というべきだろう。

第二章 「いのち」の懷疑

——「癩院受胎」を中心に——

「これだけの苦しみを受け、これだけの人間的な悲しみを味はされながら、このまま一生を無意味に過されるものか！」

（昭和九年七月二十一日 日記）

「作品すること、読むこと、観察すること、より多く苦しむこ

と。自己の完成へ。」（昭和九年七月二十四日 日記）

「書くことだけが自分の生存の理由だ。」

（昭和九年七月二十五日 日記）

高らかに自らの生命の意義をかかげ、歩き始めた北條。では果して迷うことなく、その意志力、精神力を持続できたのだろうか。生きているものは生きており、その生存の意義は自らの意志力によってある、とする理論は単純明快であるが、理論が明快であることと、その実践や持続とは別問題である。

日々進行する病魔に加えて、癩院社会の在り方は常に北條の神経にさわるものであった。「療養所の癩者はすべて國家または公共の恩恵を大なり小なり蒙って生きてゐる。」（川端康成「上巻編纂の辞」）以上、それ相当の規制、管理は止むを得ないことであったが、作品を検閲消毒しなければ院外へ送り出せないこと一つをとっても北條には屈辱であった。

加えて、一般社会から隔離され、健全な人々との接触を絶たれていくなれば、そのときすまされた神経は、ますます切迫した一点（「癩」）を見すえていくことになるのである。医学は気安めであり、治療に関わりなく癩は進行し、やがて盲目になり、肉塊となり果てる。この苛酷な事実の前で、意志も精神も往々にして昏迷に変わるのであった。

「癩院受胎」の中で、船木兵衛に、「覚悟するより他ありません。生き抜く道はその上にあるでせう。肉体を捨てることです。どんな廃残の肉体の中にも、美しい精神は育つんですからね。」と断言さ

せつつ、成瀬をして「その強さが、彼自身の内部に盛り上って来る不安と絶望に向けられてる、それを叱責する言葉。」であると分析させ、さらに「その後ずっと成瀬にある不安なものを植ゑつけた」と表現するのである。そこには意志も精神も高らかに持続することを十分に知りつつ、尚かつ意識は不安、絶望、恐怖にひっぱられていこうとする北條の「癩者になり切る」意志と、現実との苛酷な葛藤を見ることが出来る。

とはいえ、とにかく「いのちの初夜」で見せた生存への意志の力は、「癩院受胎」の船木となって完成されたのである。船木の「自己の生活を、自己の存在をはっきりと認識して生き抜く。」生活態度は、北條がたどりついた一つの結論であると考えられる。

けれども、一方には久留米という人物を配置し、「自分の生に対して絶えず罪窟ばかりつけてつじつまを合はさうと努力してゐる奴が大嫌ひ。」といわせている。久留米は「癩になって生きることそれ自体虚偽。」だといひ、「癩病がいやなんです。」と叫ぶ。この叫びは単純であるだけに強い。久留米のこのような言動は、北條がその苦悩の中から自ら見出した精神力、意志力を頭から否定するものである。久留米は、「どんなに精神が勝利しても、この肉体の敗北がたまらない。」と、北條の意志を確立した人物、船木と真正面から対立する。つまり、「癩院受胎」において、「いのちの理論」が北條自身の手によって懷疑され、否定されようとする対話がくりひろげられているのである。

最終的には、意志の否定者、久留米は自殺し、「いのちの初夜」で見出した理論の完成者、船木は眼球の摘出手術を受け、盲目の

世界へ踏み込もうとするところで作品は印象深く終っている。だが、船木の生が進行する癩の前で崩されないという保証はどこにもないのである。そこにはまぎれもない「生」の危機が迫っているともいえる。ということは、この作品を書くことによって、北條に新しい足場が見い出されたわけでは決してないことを意味しているのである。

一度は確立されたはずの生存の意義がこのように深い懷疑を産み出すのは、北條の自省心の強い性格と虚無的な心情が凝縮した一点（「癩」）を見続けることに起因するのではないだろうか。このような懷疑の裏に、はかりがたい苦悩がこめられているはずである。

「弱り切った自分の神経は、どんな些細なことにもそれを利用して狂ひ始めるのだ。」（昭和九年七月十三日 日記）

この独白はそれをはっきりと裏付けている。加えて北條は自分が社会から隔離されていることに自らの文学の限界を感じていた。

「先づ第一に僕達の生活に社会性がないといふこと。従ってそこから生れ出る作品に社会性がない。社会は僕達の作品を必要とするだろうか？ よし必要とするにしても、どういふ意味に於てであらうか。——略——要するに、一口に言へば亡び行く民族（？）の悲鳴に過ぎないのだ。このダイナミックな進行を続ける社会の中に、こんなちっぽけな、古ぼけた人間性など、何のかかはりがあるのだ。」（昭和十年七月四日 日記）

この限界の意識は、ますます北條の焦燥をかりたてたのではないだろうか。社会的人間であることを放棄し、現実を徹底的に認識することによってなる癩者の復活は、精神力、意志力によって成立す

るのであるが、その支柱となる精神力、意志力の弱さがまたふたたび自覚されはじめると、理論自体の懷疑とならざるを得ないのである。

ここで、「間木老人」「いのちの初夜」「癩院受胎」という一連の作品の中で、北條が凝視した「いのち」に対して一つの答も出されていないことに気づくのである。見い出したはずの答え、片っ端からくずされていこうとするのである。なぜなら、ぴくぴくと生きていく生命が肉体を獲得することも可能なら、一方でその肉体が絶えず癩にむしばまれて崩れていくのも哀しい事実だからである。そして、北條はその双方とも明晰すぎるほど明白に承知しているのである。この精神の葛藤の上に成る作品におそらく何の解決も下せないのではないだろうか。つまり、この二律背反するものを統合する視点など容易に見い出したいといわねばならない。

第三章 新たな自我意識の方向

——「道化芝居」が問いかけるもの——

さて、ひとたび精神力、意志力をかかげて歩き始めた自我を北條はどのように修正しながら確立していくことを試みたのだろうか。

「歴史の進展は個人を抹殺する。その歴史の進展に正しく参加したもののみが価値を有つ。唯物史観はさう教へるのだ。そしてこの俺は、抹殺さるべき人間なのだ。歴史の進展に参加し得ない（積極的に）一個人なのだ。」（昭和十年七月四日 日記）

北條にとって生きることとは個人的なことではなく、その生を社会との関わりにおいて確立することであった。癩院にも社会は存在する。しかし、すでにのべたように北條はその一員に積極的になる

うとはしなかったのである。常に目を一般社会にむけ、一般社会との接点を求め続けていたのである。けれども、自己を「抹殺さるべき人間なのだ」とみなす辛い認識を育み続けねばならなかった。社会の在りようを認識しつつ、そこから決定的に拒まれていく自己に目を注がざるを得なかったのである。

そして、同時に彼にとって、癩院の中で平穩に暮す——それは癩者に成り切り得たかどうかの問題とは別に、あきらめや、慣れによる精神の弛緩を意味したのである。実際北條は癩院生活に慣れることを恐れていた。そして、慣れることによって生じる精神のゆるみを警戒していたのである。

「僕にとって一番恐しいことは、意志が麻痺することなのです。」
(昭和十一年十二月十二日 中村光夫宛書簡)

「あきらめ切った人間は最早や生きた人間とはいへますまい。」

(昭和十一年六月十四日 五十嵐正宛書簡)

北條が慣れを恐れ、あきらめを恐れることは、いいかえれば思考の停止を恐れることであった。北條にとって思考の停止は苦痛の停止である。そして、苦痛の停止は肉体と同時に精神の死を意味したのである。

「意志だ、意力だ、思想だなんて言っても、せんじつめると、最後のどん底に来るとみな安鍍金に過ぎない、生きる力はあきらめより他にはない、ってこのことを書きたいんだよ。こんな考へは俺今まで持ったことないし、こんなのは癩にさはるんだが、どうやら真実らしいんだ。——略——しかし、果してあきらめ切れ

るか、これだよ次の問題は。」 (昭和十一年八月三日 日記)

北條はここまで徹底的に自己分析していた。そして自身でいう「次の問題」の「あきらめきれるか」というところで、いつもあきらめきれない自分を知っていたのである。

「あきらめる」という対象は何か。何をあきらめきれないというのか。それは「社会復帰」であり、「社会生活」であった。社会から「抹殺さるべき」ものでない人間として自己であった。

だが、北條の投げこまれた現実には社会から隔離されており、自由に社会行動ができる身ではなかった。あきらめきれず、しかしここでしか生きられない。そうなるとやはり彼には精神と意志をより高く強化していくしかすべがないのである。

「実際私にとって、最も苛立たしいことは、われわれの苦痛が病気から始まってるといふことである。それは何等の社会性をも有たず、それ自体個人的であり、社会的にはわれわれが苦しむといふことが全然無意味だといふことだ。」

(「校の垣のうちから」)

癩者と社会——このまったく切り離された二つの関係の間に、もし交錯する一点でもあるなら、北條は精神力、意志力を強化することも可能ではないかと考えたのではないだろうか。もし、癩者にも社会性があれば、意志も精神も社会との関わりの中で持続できたはずだからである。だが、現実の北條にとっては意志力も精神力も社会的に無用であるからには子どもの積木あそびにしかすぎないのである。積む片はしからくずされていく一人あそびでしかない。

「もっともっと思想的な小説を書きたく思っています。——

略——思想的な小説とは現實の中に思想を發見し、導き出すものだと思います。」

(昭和十一年十月十六日 川端康成宛書簡)

「百の小説を書くよりも、生きるための唯一の觀念、思想を得ることが僕には重大なのです。」

(昭和十二年五月二十四日 川端康成宛書簡)

北條が思想的な小説をめざす心の底には自らの確乎たる思想を求め、願いがあつた。社会と何とかして接点を求めたいという心から、その裏には不合理なかたちで社会主義思想を捨てざるを得なかつた自己への嫌悪がこめられているのではないだろうか。

北條は入院前にマルキストであつたといひ、その思想を入院後も否定はしていない。ところが、社会とかけ離れてはいかなくなる。思想も無意味である。なぜなら、思想とは、人生、社会に対する見解であり、社会との関わりの中ではじめて意味を持つものだからである。そしてさらにいえば、自分の生きる根拠と存在する理由を明らかにするものだからである。

北條は発病によつて社会的思想としてのマルキシズムを捨てざるを得なかつたのであるが、彼の自意識はそれを転向と受け止めたのである。つまり、北條は自分の思想が血肉となつていなくなつた証明を発病という形で自覚したのであつた。

転向については、思想の科学研究会編の『共同研究・転向』が詳細に展開しているのだが、ここでその要旨を紹介する余裕はない。

たとえば、林房雄は、「転向は単なる方向転換ではない。人間の更生である。素っ裸になることだけでは足りない。冷水で皮膚を洗ふことだけでは足りない。骨の中味まで洗つて出なほすことだ。外形ではない。内心の問題だ。」(『文学界』昭和十六年三月)とのべている。だが、北條の場合、林房雄のように、状況に流された気楽な述懐などではしなかつた。更生すべき自我は醜悪な病におかされ、社会はその業病を拒否しているのである。したがつて北條は社会における一切の觀念、属性を洗いなおさなければならなかつた。北條が影響をうけたという、ドストエフスキイの『死の家の記録』に表現されたような「信念の甦生」と等質のものを癩院の中で見い出さなければならなかつたのである。彼が求める「生きるための唯一の觀念、思想」とはこれらの一切の負の条件を認識した上で、再転向を許さない、いかえれば癩さえゆるがせない確乎たる信念と思想を得ることであつた。それが確立された時こそ、北條の自我が真に確立され、生きることを意味あるものにするようになるのである。

当時、昭和六年の満州事変勃発以後の国家権力による強制力発動から、昭和八年、佐野学、鍋山貞親の転向声明に端を發した集団転向、プロレタリア作家同盟の解散とそれに伴う転向文学の流行など、「転向」は一つの社会現象であつたといえる。いかに社会から隔離された癩院にいたるとはいえ、北條がこの社会の動きを知らないはずはなかつたであろう。

そこで發表されたのが、癩者と転向者が登場する「道化芝居」である。「道化芝居」の中で北條は癩者として閉じこめて苦惱させるのではなく、社会に放り出して語らせる方法をとつたのであ

る。社会と思想と個人の関わりに焦点があわされ、概念としての思想と、個人の内部に浸透し、血肉となつていてと思われていた思想との間にどれだけの隔りがあるか、それらの問題が長い論議として語られている。

「俺は思想に突っぱなされてしまったんだ。——略——あれは社会理論じゃないか。ところが俺は社会から拒否されてしまつてるんだ。つまり理論に拒否されたんだ。さういふ俺が、大切さうに理論を頭の中で信じてゐたつてそれが何になる。」

自ら思想を捨てた山田にむかい、発病によって信奉していた思想から引き離されて、孤独と屈辱と死をつきつけられた人間の状況を語る辻のことは、そのまま北條の叫びともいえる。

「どん底に落ち込んだ時、初めて人間はその人間性を獲得するんだ。——略——社会の奴等は苦しんだこともないくせに苦しんだやうな恰好をする。孤独になつたこともないくせに独りぼっちになつたやうな真似をして見る。愚劣だ。みな自己満足だ。だから彼等が癩病院にやつて来ると、どんな偉さうな連中でも化けの皮をはがされてしまふ。」

北條は病院の外の人々の思想に対する観念的な苦悩を批判するところで、どん底に落ちながらも人間性を失わない癩者の存在を示そうとし、また朽ちていく肉体に抵抗する高貴な精神の存在を、思想を媒体として社会に示そうと試みたのである。

だが、この試みにどのような成果が得られたか。「思想の方が俺を捨てた」と辻は社会主義を捨てたことを説明する。その叙述の部分は伏字が多く不明瞭であるが、少なくとも発病によって否応なし

にあらゆる人間的なるものとみなされている属性を奪われた人間の極限状態の叫びがある。この癒やす方法のない切実な叫びは理解できるのだが、その問題の解決がどこにあるかとなると、結局、自殺という方法でしか示されていなかったのである。北條にはあまりにも解りすぎているというべき、癩者でありながら社会と関わる事が不可能であることの確認でしかない結末となつていく。

ここで想起されるのが、「転向」を眼前につきつけられた一人の知識人の苦悩を描いた島木健作の「癩」である。

北條は昭和十年六月に、「癩」を読んだことを日記に記している。「よくこなれた立派な筆使ひ、自分など到底及びさうにもない。」（昭和十年六月六日）とその技巧を謙虚に評価している。「しかしながら、あの作がどうして生々しい現実の一断片として迫つて来ないのでらうか？ 何か横の方から眺めてゐるやうな、芝居中の悲劇を見るやうな、白々しい空虚さを感じるのは僕だけだらうか？」（昭和十年六月七日）

島木は「癩」の中で、獄中であつて、癩にむしばまれながらも非転向を貫く人間、岡田良造を、「言語に絶した苛酷な運命にさいなまれ」ながらも、「彼の奉じた思想が、彼の温かい血潮の中に溶けこみ、彼のいのちと一つになり脈々と生きていのである。」と表現している。だが、思想が完全に自分の血肉になつており、何が起ころうとも肉体がある限り思想が絶対に変わることはないとしても、この岡田の思想が通用する場所は果してどこにあるのだろうか。個人の内部で燃焼させていくだけである。それでも島木は、隔離病舎の中で、転向に心ゆれる主人公の弱さと対置して、この癩者を半ば

理想的な英雄のように偶像化しているのである。

北條から見れば、それはおそらく「白々しい空虚さ」以上のものであつただろう。癩におかされた人間の中にある思想への苦悩は、島木のように英雄化しきれものではない。もっと悲惨な、血みどろの自己の内部との闘いであり、それ以上に屈辱的な社会との闘いでもある。北條は決して島木の「癩」に対抗して「道化芝居」を書いたのではないといえるし、そのような文も残してはいない。だが、作品の完成度を今問題にしなければ、「道化芝居」こそ、極限状態の中での思想の運命を見つめたものであり、「癩」に登場する超人的な癩者の存在の最も強力な否定だといえるのではないだろうか。

北條から見れば、島木は作家としてはもとより、人間としても社会的にまだ通用する立場にいる。島木自身、結核におかされており、多量の咯血をくり返し、いわば北條と同様いつも「死」を意識していた人物であるにしても、北條のかかえ持つ癩という病気の特殊性——生きながら腐敗していくということ、「天刑病」といわれる社会的に拒否された醜悪さ——は、他の不治の病、例えば癌や結核、白血病等比べて病気の程度の問題ではなく、病気の質として絶対的な違いがあつた。島木は病身であつたが、癩者ではなかつたのである。結核より癩の方が重いという病気のランクづけをするのでは決してないが、社会に関与できる立場にいるか、否かは、その生と存在に大きな意味を持っているのである。いや決定的な岐路だといつてもよい。

平野謙は、「道化芝居」について、失敗の作だとしながらも、「痛々しい作家的野望に使喚され、渾身の努力を奮つてその宿命からの

遁走をくわだてている。」と評価し、北條の従来の作品と比較して「本質的な新しさ」を認めている。

「道化芝居」における辻の自殺は、「癩院受胎」の久留米の自殺と同一ではない。北條の目は、今まで凝視していた個の苦悩から、全体の中での個を見つめはじめたからである。個に負わされた癩の宿命は全体の中でどのようになるか問いかけているのだ。「道化芝居」では滅びでしかなかったが、今後どのように発展されていくか。「本質的な新しさ」とは北條の文学と人間における新たな足場だったはずである。

第四章 神への関心

——「望郷歌」をめぐる——

新たな足場について考えようとするとき、△神▽の問題が浮かびあがる。強い自我意識と自己の確立を希求する北條にとって、宗教はいかなる意味を持ち得たか。

「一體俺を動かしてゐるものは何だらう。俺は昨日からもう自分を動かしてゐるものが自分ではないことを知つてゐた。」

(昭和十二年三月八日 東條耿一宛書簡)

「どんなに分析したって、どんなに解釈したって、現実はそのなことに構つてやしない。現実には人間の知性がどうあらうと知らん顔して、現実には、ただ現実それ自身のために動き、それ自身の仕事を仕事としてゐる。これが運命といふものだ。」

(「道化芝居」)

「俺は運命といふものを見たよ。」と「道化芝居」で辻はいう。それは人間がどんなにあがいても越えられないある大きな力への予感ではなかったのだろうか。やがて、その予感は徐々にキリスト教への傾斜を見せていくのである。それが何をきっかけとするものであったかは、さだかでないが、一つには北條自身の鋭い自己凝視の目が癩を含めての自身の在り方自体を「大きな力」によるものではないかと考える方向にむかったことによるものだと思われる。

北條の作品と共に病者としての北條の苦悩をたどって気がつくのは、自ら見出し「癩者に成り切る」意志を彼自身が意識的にかあるいは無意識にか、否定していることである。それは癩者として生きることの無意味さ、癩者の苦悩の無意味さを語っていることでもあきらかである。入院前の社会を忘れることを前提としたその意志は、社会との関わりを忘れられないことで絶えず挫折しようとする。狭い癩院の中にむけられるだけの視野にとどまらず、常に広い社会に対し目をひらいていた北條は、自身の苦痛を社会において「一場合」にしかすぎないとして作品を書き綴らざるを得なかった。北條は「人間を書きたい。」（「頃日雑記」と願っていたのである。「現代の青年が癩になり、癩院に投げ込まれた時どんな恰好を示すか、その恰好を書けばよかったです。」）

（昭和十二年四月十日～十六日 中村光夫宛書簡）

だが、現実社会にとってこの「一場合」は醜悪で重すぎる「国辱」だったのである。自分が癩であること、癩に対する社会の風潮など、それらすべてを肯定しなければならなくなった時、人間の力ではあらがえない「大きな力」を認めるしかないのである。いいか

えれば、「大きな力」を認めることによって、「癩に成り切る」ことを求めようとしたともいえる。運命を従順に認めることが北條にできたならば、あるいは幸運だったかも知れない。又、救済してくれるものとして宗教を受け入れることができたなら、苦悩は軽減されたかも知れない。しかし、決して北條は宗教にすべてをゆだねて安らかに生きるため、すがろうとしていたのではなかった。

「信ずるためには夢中になる必要があると思ふ。夢にも自分の表情を見てはならぬのである。歪んだ表情。生硬な表情。苦しげな表情。浅ましい表情、餓えた猿が結飯に飛びつくやうな表情。これが宗教に頼らうとする時の自分の表情である。」

（「柙の垣のうちから」）

信じ切るにはさめすぎた目である。この宗教に向かう自己の表情についての自覚がある限り、宗教に安寧を求めることは彼に不可能であろう。

だが、一方ではドストエフスキイの文学に傾倒していた彼は、ドストエフスキイの作品によって、新約・旧約の聖書に接し、キリスト教思想にふれていったのである。ドストエフスキイは、一生涯神の問題に苦しんだ作家であるが、北條は彼の置かれた状況のうちで最も身近な面から神の問題に近づいていった。彼は「旧約聖書」のヨブ記を愛していた。ヨブは正しい行ないの人でありながら、サタンによって癩につかれ、財産を失い、家庭も破壊され、不幸のどん底でうめき苦しんだ人物である。おそらく北條はヨブのうめきの中に自分と同じ苦痛を発見したのではないだろうか。

「わたしにどんな力があったらなお待たねばならないのか。わた

しにどんな終りがあるので、なお耐えねばならないのか。」

(ヨブ記第六章)

「あなたは夢をもって私を驚かし、幻をもってわたしを恐れさせられる。それゆえ、わたしは息の止まることを願い、わが骨よりもむしろ死を選ぶ。」

(ヨブ記第七章)

ヨブのうめきをわがものとすることは、たとえ聖書の中の人物であっても、自分と同様の苦痛を持つ人間に出逢えれば、絶望の中で生きるこの確信となり得るし、力づけともなるものである。ヨブ記に目をこらす北條の姿が浮かびあがってくる気がする。やがて積極的にキリストについて知ろうとする姿勢を見せはじめたのも当然であった。

「聖書は何にも増して我々に源泉の感情を示してくれる。」

略——俺は俺の苦痛を信ずる。如何なる論理も思想も信ずるに足らぬ。ただこの苦痛のみが人間を再建するのだ。」

(「断想」)

北條は自分の苦痛の意味をキリストの苦痛と照らし合わせて納得しようとしたのである。

「キリストの偉大さは自己の苦痛を最後まで信じ抜いたといふ点にあるのではないですか。」——略——

「よしんば神を信じられたからにしろ——自己の苦痛を信じるのは我々には難しい。」

(「地下室の青年達」)

この会話は北條が自分の苦痛を信じようとして、キリストの苦痛にそって自己模索を重ねる内面の動きであると私は受け取る。北條

は洗礼を受けたわけではなく、又、キリストの持つ罪を容認する教えには何ら興味を示してはいない。いわば、通常のキリスト者が求めるものとは異なった位相を示しているのである。北條がキリスト教に求めたものは、苦痛を信じ切った存在としてのキリストであり、苦痛の果てになした復活だったのである。つまり、キリストを媒体として自己の苦痛を見つめていたのである。いいかえれば、自己の苦痛のより強い認識のためキリストを求めたのである。そして、そこに何よりも自己に密着した主題である癡者の復活の可能性を求めたのであった。

この思考の果てに描かれたのが最後の小説「望郷歌」である。

「人間は、なんにも出来ない状態に置かれてさへも、ただ生きてゐるといふ事実だけで貴いものだ。」

(昭和十一年六月二十六日 日記)

目的もなく、意味もなく、人間的な快楽や行動も奪われ、それでも生きなければならぬ。いわば「生きるためにだけ生きる」というところまでたどり着いたなら、「いのち」は「いのち」そのものとしてあらわれてくるのである。それはすべての出発点である。北條は「いのち」そのものの貴い存在を明確にしたのである。ドストエフスキイの『地下生活者の手記』の主人公が、どん底に落ちたら「死んでやるわ」とのべる娼婦に対して「生命がかわいそう」だと応じた以上の深さをもって、北條は「いのち」の大切さを主張しているはずである。たとえ周囲が絶望という闇であっても、「いのち」までは誰も否定することはできない。

「この年にしてこの不幸に生きねばならぬ運命を背負ってゐる

といふだけでも、地上に於ける誰よりも立派な役割を果してゐるのではないか、よしんばこれが立派な役割だと言へない無意味な不幸であるにしても、彼はその不幸に敬意を払ふのは人間の義務であると信じたのであった。」

作品の中で描かれた癩院の子ども達に対するこの感慨は、おそらく子ども達だけでなく癩院で生きることを課せられた人々に対する深い感慨でもあるだろう。それは社会で拒絶されている癩者の存在の肯定であり、いかなる状況にあらうとも「いのち」をもつ者の肯定でもある。鋭く自己凝視を続けていた北條の目が他者へ向けられた時、人間の善意が漂うような表現を獲得しているのに驚きを感じるのであるが、子ども達のたくましい生命力は、苛酷な運命にうちひしがれながらも、なお伸び上ろうとしているのであり、それを北條はおだやかに肯定しているのである。

川端康成は、北條に聖書を読むことをすすめた理由を次のようにのべている。

「私は故人に妥協を求めはしなかったが愛情を希った。醜悪で無知な癩者達に隣人の愛を懐いて生きることが、故人に課せられた運命であり、安住の境地でもあるはずだった。聖賢の書から宗教の心にのぼることを、私が故人に期待したのもそのためだった。」

〔寒風〕

北條は自らの忍耐と努力によってかすかにその道を見出し始めたところで逝ってしまった。他者にむけられはじめた目が全体に届くより、惜しむべきことに死の方が早かったのである。

この間の事情を別の側面から考察してみたい。北條は「道化芝居」において、社会と癩者を思想を仲介として結びつけようと試み、何とか癩者の苦痛に社会性を持たせようとする一方、「望郷歌」においては、「いのち」そのものの力と尊さを示している。「道化芝居」の中には、血みどろになり、あがきながら手をまさぐってふれようとした社会があり、「望郷歌」には癩院の中で見出し出した力強い生命がある。「適度に通俗的で、適度に抒情的。」（光岡良二「北條民雄——生命の火影」）な安らかさがある。北條自身はこの二つの作品に対し、「道化芝居」は、「自信は毛ほども持つことが出来ません。」「書き終ってから嫌悪を覚える。」（昭和十二年四月十三日、川端康成宛書簡）といい、「望郷歌」を「下らん作。」（昭和十二年八月十五日、日記）と評した。だが、二つの作品を創作した時の意気込みとモチーフには明らかな相違がある。

「道化芝居」については、「とはいへこの作が全く嫌ひな訳ではありませんが、云ってはならぬことを云ってしまったやうな不安を覚えるのです。」（昭和十二年四月十三日、川端康成宛書簡）といい、「望郷歌」については、「この作なんかどうでも良い、體が丈夫になつた時力作すれば良いのだと思ひ送つたのでした。」（昭和十二年八月二十六日、川端康成宛書簡）と書いている。一つは現在の自分の壁をつき破ろうとする野心作であり、思想の確立という目的を持って取り組んだ作品であった。たしかに「云ってはならぬことを云」うところまで、自己を鞭打っていたということができよう。片方は、健康もすぐれない時の作であることも加わってか、氣力の弱まりを反映した静かな作品である。北條がこの作品を自分自身高

く評価していなかったことは、前の書簡でも察することができる。しかし、「望郷歌」には、「いのちの初夜」から底流している「いのち」の輝きがある。運命にあらがいてもせず、北條が求めた「癩に成り切った」者たちの一つの姿が静かに示されているのである。

「いのち」の在りようを肯定したり、否定したり、いつも悩みなから書き続けていた北條の最後の作品が、「望郷歌」であることに私は深い興味を抱く。それはこの作品の中に「癩に成り切った」北條を見る想いがするからである。

北條にもう少し時間があれば、「道化芝居」における新しい足場を手がかりとして、癩者の宿命と社会の間に、もっと強力な接点を見い出せたであろうし、「望郷歌」に見られる「いのち」をより力強く、広い視野の中で示すことができたであろう。そして、この二つの問題を発展、統合させたところに、仮に新たな絶望や、新たな苦痛が生じたとしても、人間の在り方という根本的な問題をもっと深くつきつめられたかも知れない。二作品が暗示するのは、北條の限らない苦悩が浄化されたむこうの或る世界である。それは、社会的な思想や宗教が展開する世界より、高くて広い内的な世界の価値ではないかと思われるのである。

終章 闇からの光芒

発病以来、北條民雄には一日として平安の日はなかったであろう。自己と自己をとりまく世界を目をこらして見つめれば見つめる程、苛酷な現実であった。絶えず生きるべきか、死ぬべきかと煩悶しながら、死にきれない事実の前で苦悩し続けたのである。北條は

生きることを、生きる意味と価値とを、死に至るまで追求した。

しょせん文学とは、いかに生きるべきか、人はどうあるべきか、あるいは、人はどう死すべきか、世界や他の人々とどう関わるかの問いかけであると私は思う。そして、そこには自己から発して、社会と世界におけるさまざまな設定が織り込まれて展開されていくものである。だが、北條の提起したものは、きわめて狭い世界に主題が限定されているように見えながら、最も根本的なものであった。

いずれくずれゆく肉体をかかえ持ち、およそ人間的な喜怒哀楽も奪われている状況から出発した生命の凝視は、あらゆる修飾をとり去って裸形の「いのち」を見つめたものであった。丁度それは、司馬遷が宮刑を受け、屈辱の中に身を置き、人間としての政治、社会、道徳、倫理をすべてあきらめた上で、史実に目をこらし、『史記』を記述していった行為に酷似している。司馬遷は自身と父の無念の想いや憤りを内在しつつ、ひたすら客観的に歴史を記述し、それによって世界を根底から考えなおしたのであった。北條は無から「いのち」のみを抱いて自らの生き方を創造しようとしたのである。それは癩と、それに付随するあらゆる屈辱や苦悩を伴っての生の創造であった。それは並大抵の努力では不可能な恐るべき創造であった。その自己凝視の方法として北條はペンを取った。文学とは北條にとって、自身の生と存在の奥底を見つめるものであり続けたのである。それが川端康成に認められ、作品を紡ぎ出すにつれ、文学は生を挙げて取り組むものとなったのであろう。癩と文学は表裏一体となつて戦慄すべき死と生の局面を北條に自覚させたのである。

「僕の友人がひやかして曰く『君は自殺を一度やり損ふ度に小

説が一つ出来る、小説が書けなくなったら自殺をやり損ふの「さ」と。
(昭和十二年一月十三日、中村光夫宛書簡)

この友人のことは間近に北條の生を見ての実感であろう。友人の揶揄をとりあげる北條の目には暗い、暗いユーモアが隠されている。

北條が全生病院で、その短かい生命を燃焼させた昭和九年から十二年という時代は、金融恐慌・満州事変を経て、二・二六事件、日華事変というように、日本資本主義の矛盾が激化すると同時に、政治はその矛盾を外に向けはじめ、しだいに侵略的軍国主義的な色彩を強めていった頃であった。つまり、社会は膨大な貧困と荒廃を生みながら、戦争へと突入していこうとしていたのである。この暗く救いのない社会に、北條は精神力・意志力をもって自己の運命をなげきつつ、うめきながらも、「いのち」の存在を力強く示したのである。

北條の作品は、自己の苦悩を凝視し、追求するという、いわば徹頭徹尾主観的なものであり、時代の現実を客観的に描くというものではなかった。だが彼は、自らの個性を介して社会の暗さ以上に、人間性の暗さ、宿命の重さを文学的に対象化でき得たのである。どのような時代であれ、どのような環境であれ、等しく人に与えられている「いのち」を起点として苦悩し、創造する北條の文学は、絶望の中でも尚存在し続ける近代的な個人として人間の中に深く関わり、働きかけているのである。

現代において、癩はすでに全治する病気である。癩院も社会の中に融合し、北條が極度に嫌った「癩文学」という呼び方も消失して

しまっている。北條が「癩文学」として癩を取り扱っていたならば、おそらく時代の癩に対する認識の変貌と共にそれらの作品も消失していたであろう。しかし、北條は一人の作家として、生を賭けて文学とむかいあった。狂気にも似た生き方を身をもって示したのである。つまり、北條が自ら語るように、人間の「一場合」として癩を設定し、人間の根源的なものを見つめた作品群は、今も手にとる者に孤独な、異様に張りつめた光りをもって「いのち」を語りかけている。それは文学のもつ根源的な力であり、闇の中からさしかける一条の光芒は、私たちに「いのち」の価値と、人間の尊厳を教示し続けているということができるのである。(一九八二年卒)

参考文献

- 定本北條民雄全集 上下巻 創元社 昭和文学私記 辻橋三郎 明治書院 私立小説作家論 山本健吉 審美社 昭和文学私論 饗庭孝男 小沢書店 中村光夫全集 第五巻 筑摩書房 現代の作家 平野謙 青木書店 北條民雄——いのちの火影 光岡良二 沖積舎 川端康成全集 第五巻 第九巻 新潮社 聖書 日本聖書協会 昭和文学史 平野謙 筑摩書房 文芸評論 小林秀雄 筑摩書房 日本文学全集 「島木健作」 集英社 共同研究「転向」 平凡社 近代日本思想大系「昭和思想集Ⅱ」 筑摩書房 ドストエフスキイ小説全集 第五巻 筑摩書房 司馬遷——史記の世界 武田泰淳 講談社文庫